

なれば爾の祖と稱せしに外ならざる可く、要するに兩者の舊交に因みて新たに援けを借らんとするものなれば、かゝる文辭にも及びしものと見ざる可らず。既に甘州地方のものに非ずとせば高昌、龜茲地方の者か、若しくは、イレク・カン家のものに外ならず。もし上述の如く地理上の形勢を基として考ふる時は、北庭より西進せんとする大石が先づ援助を得んとしたるものは高昌地方の回鶻なりしなるべきこと殆んど疑ひを容れざるが如し。然れども金史の所載によれば、此の地の回鶻は天會九年(三二)に及びても尙ほ大石に與するに至らざりしものにして、此の年「九月己酉和州(高昌)回鶻執耶律大石之黨撒八迪里突迭來獻」(太宗本紀)と記せり。されば本文記載の如く一片の諭告によりて直ちに其の歸服を得たりとは考ふ可らず。大石が天會七・八年頃北庭に出でし後、九年に及びてもなほ此の回鶻とはかゝる争を續けたりしなり、然るに此の翌金の天會十年(三二)には、大石は後に述ぶるが如く、早くも吹河畔のベラサグンに入りて、イレク・カン家に代りて其地方に主權を確立するに至りしが如し。されば大石に歸服せしといふ回鶻王畢勒哥なるものは、或は此の家の可汗なりしかも知る可らず。天山南路を根據地とせる高昌の回鶻を歸服するに至らずして、直ちに其の北路を西に進みて吹河畔に至りしものと見るも、必ずしも理なきに非ず。今西方の史籍によりて大石がイレク・カン家に代るに至りし事情を見るに、アライウドデンによれば(上に引きの四萬戸を従がへし)「茲に於て彼はベラサグンに進みぬ、此の町は今蒙古人によりてグ・バリク(Gou-balik)と稱との記事の續きに)」「茲に於て彼はベラサグンに進みぬ、此の町は今蒙古人によりてグ・バリク(Gou-balik)と稱ばるゝものなり。エフラシアブ王の後系なりといはるゝ此の國の王は、既に其の勢を失ひ、領内のカル、ック及びカンカリ部族を制禦する能はず、却りて其の侵略を蒙れる有様なりき。〔契丹の〕群集が其の國に近づくや、王は之を防禦するなく却りて使を其の首領に遣はし、政權を其の手に委ねて引退すべしとの意を告げ、之を其の首府に